

# 道徳教育の評価に関する資料

# 学習指導要領、指導書、指導上の諸問題、解説に示された評価の概要①

告示	学習指導要領等の記述	小学校		中学校	
		総則	道徳	総則	道徳
昭和33年	学習指導要領の記述	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	児童の道徳性について評価することは、指導上大切なことである。しかし道徳の時間だけについての児童の態度や理解などを、教材における評定と同様に評定することは適当ではない	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	なし
	昭和33年(1958)指導書の概要(昭和36年版)	<p>○ 教育活動全体での道徳教育と道徳の時間を区別することなく、道徳性の評価について述べている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳も一定の目標と計画に従って指導されるかぎり評価を必要とする。</li> <li>・道徳的知識や判断についてはかなり客観的に測定しうる方法も考えられるが、それらについても心情・態度・行動などとの関連において総合的に解釈されることが望ましい。心情や態度は測定の困難な領域であり、教師による観察、面接、テストなどの評価、児童のチェックリスト、作文などの自己評価、友人によるゲスフーテストなどの評価、父母による質問紙、報告、教師との面接などによる評価など、広い角度から評価の資料を求める必要がある。</li> <li>・指導要録の「行動の記録」は、児童の生活で指導されるべき望ましい行動を取り上げているので、その多くは道徳に関係し、道徳教育の内容となるものであるため、道徳の評価と行動の記録との関係は極めて密接である。</li> <li>・計画や方法を評価の重要性を明示。</li> </ul>			
	道徳指導の諸問題の概要(昭和42年(1967))	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳教育の評価には、児童の道徳性について、指導あるいは学習の結果としてどれだけのものを身につけたかを確かめる面と教師側の指導計画や指導方法についてそれが期待された効果を伴って行われたかどうかを確かめる面との二面が考えられる。</li> <li>・道徳の時間の指導は、ねらいとする道徳的価値が一人一人の児童にどれだけ身につけられたかを確かめることと、教師の指導計画や指導方法とを結びつけて考えていくことが必要。</li> <li>・評価の観点として、道徳的な理解や判断、道徳的心情、あるいは両者を含めた道徳的態様の観点から考えてみることを</li> <li>・評価の方法として、観察、面接、質問紙(標準化されたテストを含む。)、作文、投影法、事例研究(逸話記録も含む。)を例示。</li> <li>・指導要録の「行動及び性格の記録」との関連について、項目の中には「基本的生活習慣」の項目以下、道徳の時間で指導する内容と対応している項目が多いため、児童の道徳性を評価するために用いた資料は、「行動及び性格の記録」の評価を行うための資料でもあり、両者は深い関連があると考えてよい。「行動及び性格の記録」の評価は、全ての学校生活を通じて評価されるものであるが、単に表に現れた行動にとどまることなく、表に現れない内面にある判断や心情をも結果としては評価することになるため、評価された結果は道徳教育の在り方を示唆する大切な資料ともなることを考えるべきだ。</li> </ul>			
昭和43年(中・44年)	学習指導要領の記述	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	児童の道徳性について評価することは、指導上大切なことであるが、道徳の時間だけについての児童の理解や態度などを、各教科における評定と同様に評定してはならない。	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	道徳の時間の評価の一環としての生徒の道徳性の評価は、各教科における評定と同様に評定するものではないが、指導上大切なことであり、指導計画や指導方法の改善の基礎をなすものでもあるから、それが適正に行なわれるように努める必要がある。
	昭和44年(1969)指導書の概要	<p>○ 教育活動全体での道徳教育と道徳の時間を区別することなく、道徳性の評価について述べている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳教育の評価を児童の道徳性が指導の結果どれだけ高まったか、教師による指導計画がどれだけ適切に作成され、指導方法がどれだけ効果的に用いられたかの二面がある。</li> <li>・道徳性の評価を一人一人の児童や学級、学校的全児童の道徳性が道徳教育の目標や内容に照らして、どの程度身についたかを明らかにすることとしている。</li> <li>・道徳的判断力の評価と道徳的心情や道徳的態様の評価とを区分して考えること自体を便法とした上で、これらを相互に関連させ、広い視野に立って評価するという配慮が必要であるとして、道徳的な判断力、道徳的心情、道徳的態様などの評価の観点を例示。</li> <li>・評価の方法として、観察による方法、面接による方法、質問紙、検査などによる方法、作文による方法を例示。</li> <li>・評価の配慮事項として、幾つかの方法を互いに補足し合い広い視野に立って総合的に用いること、道徳教育の効果は短時日には期待できないため教師は根気よく長い目で児童の変化を観察し、評価する心構えが必要であることなどを示す。</li> <li>・指導計画、指導方法の評価を示す。</li> </ul>			

# 学習指導要領、指導書、指導上の諸問題、解説に示された評価の概要②

告示	学習指導要領等の記述	小学校		中学校	
		総則	道徳	総則	道徳
昭和52年	学習指導要領の記述	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。しかし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。	指導の成果を絶えず評価し、指導の改善に努めること。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。しかし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。
	昭和53年(1978) 指導書の概要	昭和44年(1969) 指導書の概要とほぼ同様			
	昭和54年(1979)指導上の諸問題の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳性は、人格の全体に関わるものであって、学校、家庭、社会のあらゆる生活の場で、様々な要因によって形成されるものである。したがって、道徳性の評価は、時間を重ね、長い目で総合的に行うことが大切。</li> <li>・道徳の時間における評価は、期待される望ましい道徳性が、児童にどの程度身についたかを問題とし、次の指導の工夫へと発展するもの。</li> <li>・評価の観点として、道徳的な理解や判断、道徳的心情、あるいは、両者を含めた道徳的態度と実践意欲の三つの様相について考えてみること。</li> <li>・評価の方法として、観察、面接、質問紙や検査など、作文、投影法、事例研究によるものを例示。</li> <li>・指導計画、指導方法の評価を示す。</li> </ul>			
平成元年	学習指導要領の記述	指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行うとともに、学習意欲の向上に生かすよう努めること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。ただし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。	指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行うとともに、学習意欲の向上に生かすよう努めること。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。ただし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。
	平成元年(1989)指導書の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳教育における評価は、常に指導に生かされ、結果的に児童の成長につながるものでなければならない。道徳教育においては、児童の道徳性を評価し、指導の充実に生かすことが大切。</li> <li>・道徳性の評価は人格の全体に関わるものであり、不用意な評定をしてはならない。</li> <li>・評価の観点として児童の道徳性をできるだけ客観的に見る目を養うと同時に児童はよく生きようとしているという信念と、児童の成長を信じ、願う姿勢をもつこと教育者としての姿勢を示し、道徳性の諸様相の評価として道徳的心情、道徳的判断力、道徳の実践意欲と態度並びに道徳的習慣について分析し評価することを示す。</li> <li>・評価方法として、観察、面接、質問紙や検査など、作文、事例研究法や投影法を例示。</li> <li>・道徳の時間の評価は、それにより児童の道徳性がどう変容したかを把握することから、改めて指導過程や方法について検討し、次の時間の指導に生かすことができるものでなければならないこと、指導過程や指導方法の改善に役に立つ多面的な評価を心掛ける必要があること、学級における全教育活動での道徳教育を充実させる手掛かりを与えるものになるように留意することを示す。</li> </ul>			
	平成2年(1990) 指導上の諸問題の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳教育の指導計画や方法を改善のための評価を強調。道徳教育の評価は、まず児童の道徳性の現状の実態把握が適切に行われる必要があり、一定期間の指導の後に、児童の道徳性の変容について評価することも大切。道徳教育における評価は「終わり」ではなく、常に「始まり」という考えに立つことが必要。</li> <li>・道徳性の実態についての把握は、実際の指導に生かすことを目標として、一般的には道徳の内容項目をどの程度調和的に内面化しているかをみるが多いとしている。</li> <li>・実態把握のための方法は質問紙が有効だが、多様な方法で行い、計画立案に生かすこと。</li> <li>・道徳性の実態把握に基づく各指導計画作成の基礎資料としての活用、児童一人一人についての指導課題の把握に生かす。</li> <li>・道徳性の変容の評価に当たって、直接的な観察を中心として、必要に応じて様々な方法を用いて総合的に判断することが大切。</li> <li>・道徳教育の指導計画についての評価と活用、道徳の時間の指導の評価は、どのように行い、活用が示されているが、道徳の時間については指導方法の評価が述べられている。</li> </ul>			

# 学習指導要領、指導書、指導上の諸問題、解説に示された評価の概要③

告示	学習指導要領等の記述	小学校		中学校	
		総則	道徳	総則	道徳
平成10年	学習指導要領の記述	児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。	生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。
	平成10年(2008)解説の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳教育における評価は、教師が児童の人間的な成長を見守り、よりよく生きようとする努力を評価し、勇気づけるはたらきをもつもの。</li> <li>・児童の道徳性については、一人一人の児童が道徳教育の目標や内容を窓口として、どの程度成長したかを明らかにするように努めることが大切。</li> <li>・客観的な理解の対象とされるものではなく、教師と児童の温かな人格的な触れ合いやカウンセリング・マインドに基づいて、共感的に理解されるべきもの。</li> <li>・道徳性の理解の観点として、児童との心の触れ合いを基盤にすること、道徳性の諸様相の理解をすることを示す。</li> <li>・共感的理解と評価の方法として、観察による方法、面接による方法、質問紙などによる方法、作文や日記、ノート、ワークシートなどによる方法、事例研究法や各種のテストを例示している。</li> <li>・理解と評価の創意工夫と留意点として、共感的理解を基盤として広い視野から継続的・総合的に理解し評価すること、指導後に見られる児童の心の動きの変容などを的確にとらえる方法と、根気よく長い目で児童の変容を観察する方法とを併用する必要があることなどを示している。(児童理解の配慮事項が中心に述べられている)</li> <li>・指導計画、指導方法の評価を示す。</li> <li>・道徳の時間の指導に関する評価が示されている。</li> </ul>			
平成20年	学習指導要領の記述	児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。	生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	生徒の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。
	平成20年(2018)解説の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳の時間において道徳性は、人格の全体に関わるものであり、数値などによって不用意に評価してはならないこともこうした点を踏まえ、それぞれの指導のねらいとの関わりにおいて児童の心の動きの変化などを様々な方法でとらえ、それによって自らの指導を評価するとともに、指導方法などの改善に努めることが大切。</li> <li>・道徳性の理解は、このような教師と児童の心の触れ合いの中でなされる共感的な理解によるべき。</li> <li>・道徳性の理解や評価に当たっては、指導の目標、ねらいや内容をその窓口とするが、それとともに、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度及び道徳的習慣などの観点から分析することが多い。</li> <li>・評価の方法として、観察や会話による方法、作文やノートなどの記述による方法、質問紙などによる方法、面接による方法、具体的な事例を検討する方法、各種のテストを用いる方法を例示。</li> <li>・評価の創意工夫と留意点として、道徳性に関する自己理解・自己評価をその内面から理解していくように努めること、児童のよさや個性を積極的に受け止め、多面的で幅広い視点に立った評価を心掛けること、児童一人一人の姿や変化を具体的に記述できるように努力し、個に目を向けた評価となるようにすることなどを記述。</li> <li>・道徳の時間は児童の人格そのものに働き掛けるものであるため評価は難しいが、可能な限り児童の変化をとらえ、それらを日常の指導や個別指導に生かしていくように努めなければならない。</li> <li>・指導計画等の記述はない。</li> </ul>			

# 学習指導要領、指導書、指導上の諸問題、解説に示された評価の概要④

告示	学習指導要領等の記述	小学校		中学校	
		総則	道徳	総則	道徳
	学習指導要領の記述	児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。	生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。	生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。
平成27年	平成27年(2025) 解説の概要	<p>道徳科の評価の具体的な在り方については、平成27年度に文部科学省において、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 数値による評価ではなく、記述式であること。</li> <li>・ 他の児童との比較による相対評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、励ます個人内評価として行うこと。</li> <li>・ 他の児童生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する必要があること。</li> <li>・ 個々の内容項目ごとではなく、大くくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。</li> <li>・ 発達障害等の児童についての配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。</li> <li>・ 現在の指導要録の書式における「総合的な学習の時間の記録」、「特別活動の記録」、「行動の記録」及び「総合所見及び指導上参考となる諸事項」などの既存の欄も含めて、その在り方を総合的に見直すこと。</li> </ul> <p>を前提に専門的に検討を行い、教師用指導資料の作成や指導要録の改正を行うこととしている。各学校においては、これらに基づき適切に評価を行うことが求められる。</p>			

## 第5章 道徳科の評価

### 第1節 道徳科における評価の意義

#### (1) 道徳教育における評価の意義

教育における評価は、生徒にとっては自分の成長を振り返る契機となるものであり、教師にとっては指導計画や指導方法を改善する手掛かりとなるものである。

(参考)「第1章総則」の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2の(6)及び(12)

各教科等の指導に当たっては、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるようにすること

生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること

他者との比較ではなく生徒一人一人のもつよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、学期や学年にわたって生徒がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが重要。

道徳教育においてもこうした考え方は踏襲されるべきものであり、その評価は、常に指導に生かされ、生徒の成長につながるものでなくてはならない。学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育における評価については、教師が生徒の一人一人の道徳的な成長を温かく見守り、共感的な理解に基づいて、よりよく生きようとする努力を認め、勇気付ける働きをもつものであり、生徒自身による道徳的価値に裏打ちされた人間的な成長の振り返りや道徳性の育みを支援するものである。それは、教師と生徒の温かな人格的な触れ合いに基づくものでなくてはならない。

# 学習の振り返りの例

## 1年間の学習の振り返り

道徳の記録（3学期のまとめ）

2013年 3月 6日

3年 組 番氏名

(1) 3学期に、道徳で取り組んだ題材は次の通りです。

副読本の題材	心のノートの関連箇所
① よし、かかってこい（希望・勇気・強い意志）	30 31 32 33
② 人類と地球の未来のために（国際理解・人間愛）	128 129 130 131
③ 江戸しぐさは心のマナー（公德心・社会通帯）	96 97 98 99
④ 命の力のおすそわけ（感謝）	64 65 66 67
⑤★車いすの少年（思いやりの心）	48 49 50 51
⑥ 母よりの年賀状（家族愛）	112 113 114 115
⑦ 蕨のとう（勤労の尊さ・奉仕・公共の福祉）	108 109 110 111

(2) 上記の「心のノート」は仕上がっていますか？

まだ記入していないワークシートがあったら、記入してください。

1年間で取り組んだ道徳の内容		
1学期	2学期	3学期
① 女闘志 成田真由美	⑬ 友情切符	⑳ よし、かかってこい
② 人生、一度だけだから	⑭ よみがえった笑顔	㉑ 人類と地球の未来のために
③ 校門を囲む子	⑮ 一針一針	⑳ 江戸しぐさは心のマナー
④ 「情報」と「形」の国、日本	⑯ すばらしい青年たち	㉒ 命の力のおすそわけ
⑤ 「ありがとう」といわれる自分に、 言える自分に	⑰★会場コンクール	㉓★車いすの少年
⑥ 人に迷惑をかけないということ	⑱★響け15歳のハーモニー ～ある中学合唱部の挑戦～	㉔ 母よりの年賀状
⑦ 自信をもって、自分自身のために	⑲★祖母と私	㉕ 蕨のとう
⑧ 「チームQ」の絆	⑳ さわやかな笑顔	㉖ 1年間のまとめ
⑨ 忘れていた手紙	㉑ 一枚のはがき	
⑩ 笑顔がかけられる橋	㉒ 宇宙の「なごさ」にて	
⑪ ボクは新人	㉓★傍観者でいいのか	
⑫ 学期のまとめ	㉔ 方言は父や母からの贈り物	
	㉕★バスと赤ちゃん	
	㉖ 自分探しのチューニング	
	㉗ 学期のまとめ	

### 3年間の道徳の時間を振り返って

2013.3.6

3年間取り組んだ道徳の時間も最後になりました。希望や勇気、思いやりの心、信頼や友情、公德心、郷土愛など、様々なことを東田中で考え行動したと思います。かけがえのないきみたちへ最後に詩を送ります。

自分をさがし続けた三年間  
 どんな自分をつくってきたのだろう  
 迷いながら とまどいながら  
 つまづいたり 転んだり  
 何度もくじけそうになったけれど  
 こうして今を 迎えられたのは  
 ずっとみんながそばにいてくれたから

二度とおどずれることのないこの大切な三年間  
 わたしたちはなぜめぐり会ったのか  
 その意味がいま わかったような気がする

人生には  
 出合いの数だけ 別れがあるから  
 さようならなんて言わないけれど  
 これだけは めいっばい  
 大きな声で伝えたい

みんな ありがとう  
 本当に 本当に  
 心から ありがとう

（心のノートより抜粋）

私たちの最も素晴らしい学光は、決してくじけないことではなく、くじけるたびに  
 起き上がってくることにある。【オリヴァー ゴールドスミス】

## 第5章 道徳科の評価

### 第1節 道徳科における評価の意義

#### (2) 道徳科における評価の意義

(参考) 「第3章 特別の教科 道徳」の第3の(4)

生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする

これは、道徳科の評価を行わないとしているのではない。道徳科において養うべき道徳性は、極めて多様な生徒の人格の全体に関わるものであり、数値などによる評価を行うことは適切ではないことを特に明記したものである。したがって、教師は、こうした点を踏まえつつ、それぞれの時間における指導のねらいとの関わりにおいて、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉え、それによって自らの指導を評価するとともに、指導方法などの改善に努めることが大切である。道徳科における評価においても、生徒自身による自己評価を生かして人間としてよりよく生きようとする努力を支援するとともに、生徒の道徳的なよさや道徳的成長に対する共感的な理解に基づいて指導計画や指導方法を評価し、その結果を指導の改善に生かしていくことが求められている。



## 第5章 道徳科の評価

### 第2節 道徳性の理解と評価

#### 1 評価の基本的態度

道徳科で養う道徳性は、生徒が将来いかに人間としてよりよく生きるか、いかに諸問題に適切に対応するかといった個人の問題にも関わるものである。生徒自身による自己評価の機会や場を充実し、そうした姿勢を生徒自身に育むとともに、常に生徒の立場に立って生徒を受容し尊重する共感的かつ確かな生徒理解に基づく道徳性の評価を心掛ける必要がある。

道徳性の評価の基盤には、教師と生徒との人格的な触れ合いによる共感的な理解が存在することが重要である。その上で、生徒の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりすることによって、生徒が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指すことが求められる。なお、道徳性は、極めて多様な生徒の人格全体に関わるものであることから、個人内の成長の過程を重視すべきである。

# 生徒自身による自己評価の例

2015. 2. 4

道徳「傍観者でいいのか」ワークシート

1年\_\_組\_\_番 氏名\_\_\_\_\_

話し合いメモ欄

○ 横田さんの言葉を聞いて、はっとした私は、どんなことを思っただろうか。

学んだこと、考えたこと

○ 本時の学習で、学んだこと、考えたことを書きましょう。

学習状況の評価

○ 今日の学習について振り返ってみよう

	とても思う	まあ思う	あまり思わない	ほとんど思わない
資料はよかったか	4	3	2	1
友人の考えに触れることはできたか	4	3	2	1
深く考えることができたか	4	3	2	1
自分を振り返ることはできたか	4	3	2	1

## 第5章 道徳科の評価

### 第2節 道徳性の理解と評価

### 3 道徳科の授業に対する評価

#### (3)授業に関する評価の工夫

##### ア 他の教師による評価

公開授業を行ったり、チーム・ティーチングの協力者から評価を得たりする機会を得ることも重要である。その際、あらかじめ重点とする評価項目を設けておくと、具体的なフィードバックが得られやすい。

##### イ 授業者自らによる評価

授業者自らが記憶や授業中のメモ、板書の写真、録音、録画などによって行う評価も大切である。録音や録画で授業を振り返ることは、今まで気付かなかった傾向や状況に応じた適切な対応の仕方などに気付くことにもなる。生徒一人一人の反応や変容を確かめる手立てを用意しておき、それに基づく評価を行うことも考えられる。

分掌の道徳部会や学年会あるいは校内研修会等で、道徳科の指導記録を分析し検討して指導の改善に生かすとともに、日常的に授業を交流し合い、全教師の共通理解と共通実践のもとに評価を行うことが望ましい。その際、生徒にとってその時間の学習がどうであったかが十分評価できるよう、特に生徒の発言や表現されたものなどをもとにその内容を多面的に分析検討することが必要である。また、生徒が、道徳科における学習の過程でお互いのよさを見いだしたり、お互いの成長を実感したりすることができるよう、生徒による自己評価や相互評価の在り方を工夫・改善していくことも大切である。

#### (4) 評価の工夫と留意点

道徳教育における生徒の道徳性に係る評価は、計画に基づいた指導の中で、一時期の様子だけで即断することなく、継続的に生徒の成長を見守り、努力を認めたり、励ましたりする評価を積み重ねる。その評価は、要である道徳科の評価に生かし、生徒の道徳性を更に養っていくかまえをもつことが大切である。生徒自身が道徳的価値と人間としての生き方についての関わりにおいて自覚を深め、自己のより豊かな心の成長を実感できるようにすることが大切である。生徒が自らの成長を実感し、更によりよい生き方を求めて努力する意欲が生まれるよう、生徒の自己評価を工夫することも大切である。年度当初などの節目において、生徒自身に重点的に取り上げたい道徳の内容を考えさせる取組も有効である。

## 「ポートフォリオ評価」

児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

## 「パフォーマンス評価」

知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品(プロダクト)や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演(狭義のパフォーマンス)を評価する。

## 「エピソード評価」(※)

児童生徒が道徳性を発達させていく過程での児童生徒自身のエピソード(挿話)を累積することにより行う評価方法。暫定的に授業時間に発話される記録や記述したものを「短期エピソード」、生活の中での言動や記述を「長期エピソード」として集積。

- 児童生徒が行う自己評価や相互評価は、児童生徒の学習活動であり、教師が行う評価活動ではないが、児童生徒が自身のよい点や可能性について気付くことを通じ、主体的に学ぶ意欲を高めること等学習の在り方を改善していくことに役立つことから、積極的に取り組んでいくことも重要である。

(平成22年3月24日 児童生徒の学習評価の在り方について(報告)平成22年3月24日 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会)

※ 第3回会議配付資料より作成。